

令和6年度第2回奈良市アートプロジェクト実行委員会 会議録

開催日時	令和7年2月28日（金）14時から15時20分まで	
開催場所	奈良市役所 中央棟5階 秘書広報課 応接室（キャンベラの間）	
次第	1 開会 2 委員長挨拶 3 議事 （1）令和6年度事業報告について （2）令和7年度事業計画（案）について 4 閉会	
出席者	委員	仲川委員長、佐々木副委員長、青木委員、萩原委員、北谷委員【計5人出席】
	ディレクター	森山朋絵氏／メディアアート※名称検討中 プログラムディレクター（案）
	事務局	谷田事務局長（奈良市市民部長）、池田事務局次長（奈良市市民部次長）、森事務長（奈良市文化振興課長）、吉川、奥村、仲川、守道、杜、桑理（事務局・文化振興課）
開催形態	公開（傍聴人なし）	
決定事項	●全議案について 承認された。	
担当課	奈良市アートプロジェクト実行委員会事務局（市民部文化振興課）	

議事の内容

1 開会

2 委員長挨拶

3 議事

(1) 第1号議案 令和6年度事業報告について

(2) 第2号議案 令和7年度事業計画（案）について

（事務局より説明）

令和6年度事業報告（※資料1参照）

- ・事業全体を美術部門と演劇部門に分けてプログラムを展開、事業全体で10,816人が参加。前年比4,256人増。3月1日（土）開催の古都祝奈良シンポジウムは300人の定員に対して400人を超える応募があった。
- ・「ワンダリングウィーク」（※「古都祝奈良 文化祭」より改称）では、アーティストが主催する「ゼミ」「ラボ」「座学（グリーン・マウンテン・カレッジ）」と、公募により集まった市民による「部活」を開催。
- ・「古都祝奈良の学校」は、若手アーティストの活動の場を奈良に開くことと、3年目に「教科書」を作成することを目的として、1年目の参加者は7組9人で実施。
- ・「古都祝奈良シンポジウム」は明日（3月1日）開催。「東アジア文化都市2016奈良市」10周年を記念して、2026年から始動する新たなアートプロジェクトについて、メディアアーティストや専門家らと考える。

- ・「まちなか舞台」では公募で集まった演劇団体等が劇場を飛び出し市内3か所で公演を実施。「青少年と創る演劇 Lite」では、中高生たちがならまちセンターで、令和5年度開催のワークショップで市民が創作した戯曲を使用したリーディング劇を上演した。
- ・多様な人材の発掘、文化芸術に関する市民の交流機会の促進、地域資源の活用、あらゆる人が文化芸術に触れる機会の提供等、ならまちセンター「コトナラボ」が市民の学び合いの場として開かれ、創造発信拠点としての機能を発揮できた。また、効果的な周知方法の検討、事業スケジュールの見直し等の課題も確認した。

令和6年度事業決算見込み（※資料1-1参照）

- ・収入の部、プログラム参加者より参加費の徴収を行った。演劇創作プログラムの制作上演業務委託先の田上パルに徴収を委託、プログラム運営費に充当された。
- ・支出の部、明日（3月1日）開催のシンポジウム経費など未実施の事業経費は全額執行とした決算にて決算見込みとしている。清算予定額は変動する可能性があるため、改めて来年度実行委員会にて諮る。

（事務局より説明）

令和7年度事業計画（案）（※資料2参照）

- ・演劇は田上豊氏をプログラムディレクターに迎え、「青少年と創る演劇」「まちなか舞台」「パフォーミングアーツ」を展開。
- ・「古都祝奈良の学校」2年目。2期生募集とメンターとの合宿等を行う。1期生はプランをブラッシュアップし、プログラム3年目の令和8年度に1、2期生ともに企画実現会議でプレゼン、選抜された企画の制作費用を支援する。プログラムディレクションチームは小山田徹氏、藤浩志氏、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ氏。
- ・継続事業「グリーン・マウンテン・カレッジ」の実施。「ならまちワンダリング」はならまちセンターでのアートプロジェクトとして、アートコーディネーターによる指定管理事業への移行予定。

令和7年度事業予算（案）（※資料2-1参照）

- ・予算については市予算議決前のため想定として、収入は市からの負担金1,120万円、プログラム参加者の参加費、観覧料を3万円と見込んでいる。文化庁補助金（文化芸術創造拠点形成事業）に関しては現在審査中だが、当事業は486万4千円で申請。支出は主なところが、演劇経費430万円、古都祝奈良の学校とグリーン・マウンテン・カレッジ経費215万円、メディアアート経費300万円と見込んでいる。改めて予算は諮る。

（メディアアート※名称検討中 プログラムディレクター（案）森山朋絵氏より説明）

- ・奈良県内の教育機関と連携し、アートとテクノロジー及びサイエンス領域など、普段出会っているようで出合っていない領域を融合した体験型プログラムを検討。
- ・第一線で活躍中のメディアアーティストにアドバイザーやメンターとしての参加を依頼、国内外のメディアアート、アート&サイエンス、宇宙芸術、量子芸術などの領域の研究者、作家、文学者、地元奈良ゆかりの歴史系を含むアーティストがコラボする内容で1年目にリサーチ、2年目にアート作品として成果を展示する展開を構想している。奈良に、メディアアート領域の若い作り手たちの発表の場が出来ればと考えている。

⇒第1号議案、第2号議案、承認。

（委員からの意見）

佐々木副委員長

- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大が収まり、全国的に色々な事業が活発化している。東アジア文化都市事業にも関心が集まっており、またユネスコの創造都市ネットワーク日本（CCNJ）への申請も活況を呈して

きた。当初の申請は大都市が多かったが、それ以外の都市も入ってきている。奈良市が東アジア文化都市開催から 10 周年を経て次を考える時、日本の文化都市の代表としてそれなりの存在感を示すのであれば、何年か先に創造都市ネットワークに申請する計画を立てた方が良いのではないかな。

- ・例えば、奈良市アートプロジェクト実行委員会は奈良市の様々なアートプロジェクトの予算を審査するなどの機能を充実させていき、奈良市アーツカウンシルという方向に踏み出すのも一つ。
- ・プロジェクトの次のステップとして新しい分野のメディアアートで展開することは面白い。メディアアートはぜひやるべき。部活という言葉があったが本格的に応援するプログラムなどもあって良い。
- ・演劇は豊岡市の芸術文化観光専門職大学などと連携を意識して、何かプログラムが組めると良いかもしれない。

仲川委員長

- ・地方都市でメディアアートを軸に何かを今この時代からやろうとすれば、やり方や規模など、どのような可能性があるのか。

→ (森山氏)

- ・大規模に代理店などが入って観光資源として行うというよりは、やはり支える人の魅力が大きい。人口約 19 万人のオーストリア、リンツ市で設立されたアルスエレクトロニカ（※リンツ市を拠点に 40 年にわたり「先端テクノロジーがもたらす新しい創造性と社会の未来像」を提案し続けている世界的なクリエイティブ機関／公式 web より）では、先端的な作品を街なかで人々との連携の上で行っている。
- ・学校教育の中で必修となった映像メディア教育やプログラミングで学んだことを発表する場が街なかにあればとても良いと思うし、また日本の歴史ある都市として奈良に興味を持つ国内海外の人たちを、アーティストインレジデンスとして小規模で受け入れるなど、そういうところから始めるのも良いかもしれない。
- ・メディアアートやメディア芸術は、見せる手法、伝える手法として力を発揮する領域。発表の場として寺社仏閣や歴史的な場所は、場所性が豊かで非常に良いと考える。

(委員からの意見)

佐々木副委員長

- ・2016 年の時、寺社に働きかけて現代アートを展開したが、あれをメディアアートで行えば面白い。それは奈良でしかできないこと。

萩原委員

- ・学校現場では漫画やアニメの部活は盛ん。例えばメディアアート部を奈良市主導で作って中学生などがオープンに入れるようにする。日常的な活動に繋がり、若い才能の掘り起こしや刺激になる可能性はある。
- ・所蔵作品のデジタル化等を進めている入江泰吉記念奈良市写真美術館とも資源の活用などの連携が考えられるのではないかな。

北谷委員

- ・デジタル教育など、次にもっと挑戦したいという子どもたちに学びの環境や仕組みを与えることが、私たち大人の作るべき教育環境と考える。学校だけでは完結できない学びのサポートが出来て、次のステップに繋がったり、将来イノベーションを起こすなど、どんどん広がっていく才能を引き出せる場面はたくさんあると思う。子どもたちが参加できる機会があることで、ますます伸びていくのではないかと期待する。
- ・部活動についても、仕掛けをしていくことでもっと広がっていく才能を引き出せる場面は沢山あるだろうと思う。そういったところに子どもたちをいかに参画させていくかを、ぜひ積極的にやっていきたい。

青木委員

- ・奈良は古い町であり変化がないと思っていたが、この頃は町中で芸術を感じる機会が増えた気がする。若い方は実際に文化芸術活動が出来るが、年配者はなかなか参加までは至らない。しかし身近で新しい刺激に触れられると、それが楽しみにもなり良いことと思う。

仲川委員長

- ・学校ごとでは中々呼べないような先生をメディアアート部として奈良市で呼んだり、リモート環境で不登校の子どもたちに部活参加の機会を提供出来るかもしれない。埋もれたところにある才能をうまく引き出すことも社会的な役割かと思う。
- ・部活であったり、メディアアートのプログラムについては、最新の潮流を捉えて、数年間をまたぐ展開を念頭に置きながら、どこに注力するのかを考えて進めて行くことが必要と考える。

→（森山氏）

- ・部活は凄く良いコンセプト。メディアアートは本来、高度な機材を使って難解かつ専門的にやるというものではなく、分かりやすく発信型で人々を取り込むようなもの。そこに行けば誰かが何かを作っているスタジオのようなものを町に置く。例えば東京都だと CCBT（シビッククリエイティブベース東京）が渋谷にあり、そこは工房のようなコミュニティーが生まれる場所となっている。小さくても良いのでそういう拠点を持てたら良い。文化庁のクリエイター発表支援プログラムなど、この領域で、成果発表の場を探している助成もある。奈良の町のラジカルでアルカイックな素晴らしさを前面に押し出していけたらと思う。

4 閉会